私（重政優）は、2017 年 12 月 19 日～25 日の 6 日間、まさにクリスマスシーズン真っ只中のバチカン市国やローマなど、イタリアの主要都市に派遣していただきました。

私は、被爆地ヒロシマに生まれ育つ者として、そして、被爆地広島と長崎を代表して、自分の果たすべき役割を胸に抱いて行かせてもらいました。

4 百年以上前に「天正遣欧少年使節団」（中浦ジュリアン、原マルチノ、千々石ミゲル、伊東マンショ）が見た景色を自分たちも見ているのだという事実に深い感動を覚えました。

私たち（派遣された日本代表の高校生4人）は、12月20日、特別席を用意していただき、在バチカン中村芳夫大使と最前列で、ローマ教皇様のお話を拝聴することができました。その後、私たちの平和への願いを綴った作文を、私が代表して手渡すという使命をいただいており、教皇フランシスコにお渡しすることになりました。

私は作文に加え、被爆地・広島や長崎の平和のシンボルである折り鶴と、自分が生まれ育った福山の平和のシンボルである折りバラを添えて渡させていただきました。（福山は1945年8月8日、空襲によって市街が焼き尽くされ（福山空襲）、その後、バラを植えることによって、町を復興させようと先人たちが努力してきました。だから、「折りバラ」がいっしょにあるのです）

そのとき私は彼に、“ I’m from Hiroshima.”と伝えました。すると、それまで柔らかな笑顔だった教皇様の表情が真剣な眼差しに変わり、私をじっと見つめました。“ Pray for us to abolition nuclear weapons. ”と続けると、彼は“The atomic bomb is scary. We never forget them.（原爆は本当に恐ろしいものだ。決して忘れてはならない）”と、私たちに力強く語りかけてくださいました。

さらに、教皇様が自ら私の手を取り、“Don’t forget”と言ってくださいました。そのときのことは、今でも鮮明に覚えています。また、湯崎広島県知事からのメッセージも絶対に伝えなければならないと強く感じ、「どうか被爆地ヒロシマ・ナガサキに来て被爆者に会って、手を握ってください」とアピールし、伝えました。

私たちが帰国後、教皇様は長崎の「焼き場に立つ少年」の写真を世界中に配布するように指示されました。私はこのことを知り、あの時、私たち広島・長崎という被爆地の、

また、日本という被爆国の核廃絶の思いが少しでも教皇様に届いたのかもしれないと思いました。そして、胸が熱くなりました。日本から遠く離れたところで、核廃絶、絶対平和、そして被爆者の方々に祈ってくださっているのだと確信しています。

“Small is beautiful”. 私が大好きな言葉です。自ら被爆者で、広島から世界に、核廃絶を訴え続けた故・森瀧市郎先生のことばです。それは、ヒロシマ・ナガサキの核廃絶への信念でもあります。今回の派遣と直接の対話は、長年にわたる被爆者の方々の小さな運動の積み重ねと市民の連帯があったからこそ起きた奇跡です。被爆者の方々と多くの市民のみなさまの、これまで72年間の平和への連帯に心から感謝しています。

イタリア滞在中、私の心はいつでも被爆者の方々と共にありました。教皇様を含む、今回面談をさせていただいたすべての高官の方々は「若者の手で平和な世界を築いてほしい」と言われていました。被爆者が次々と亡くなる現実。だからこそ、私たちは平和のバトンを確実に受け取り、継承しなければならないのです。核兵器廃絶のために。世界平和のために。人類が生きるために。

たくさんの人の応援があったからこそ、このように、確かな学びを得て帰ってくることができました。私を選んでくださった上智学院の高祖先生はじめ関係者の方々、湯崎広島県知事や松岡広島県議会副議長、県民のみなさま、私の誇りうる学舎・盈進学園の鎌刈理事長先生をはじめとする先生方や大好きな仲間たち、これまで出合った人々、全世界の平和を願う市民の方々に感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございました。

改めて、これからもずっと、私は、被爆者の方々と共に地道に謙虚に活動していく決意です。

2018年2月8日　盈進高等学校2年　重政 優（しげまさ ゆう）